

<中期ビジョン2018について>

青森県精神保健福祉士協会 会長 山田 伸(聖康会病院)

1999年に当時32名の会員で設立された青森県精神保健福祉士協会(以下、県協会)は、2016年9月30日現在で130名を超える会員数となりました。その間に私たちを取り巻く状況は変化し、活動領域は拡大し、役割や社会から求められるものが多様化しています。

精神保健福祉士に求められる社会的使命と役割を実現するための組織を目指すため、県協会では2016年度から2018年度までの3か年、活動指針としての「中期(3か年)ビジョン」と実践計画としての「中期(3か年)計画」に基づき、毎年度の活動及び事業の実践計画を展開していきます。会員の皆様には活動及び事業にご参加いただきながら、ぜひとも様々なご意見を賜りたいと存じます。今後ともよろしくお願いたします。



中期ビジョン2018

スローガン:「実践力!」

向上
資質の向上

『青森県内の精神保健福祉士が、つながり、資質の向上を目指し、実践力を高める。』

- ・ 研鑽の機会を提供
- ・ 専門性向上のための機会を提供

発信
情報の発信

- ・ 会員への協会活動の情報発信
- ・ 関係機関への協会活動の情報発信

強化
組織の強化

- ・ 理事間の連携強化
- ・ 地区支部活動の強化
- ・ 入会促進

3つの柱

【会費の納入をお願いいたします】正会員 5,000 円、準会員 3,000 円、賛助会員 1,000 円

振込先:青森銀行 五所川原支店 普通1883187 名義:青森県精神保健福祉士協会 代表 山田 伸

<活動報告>熊本地震におけるDPAT 派遣報告

青森県精神保健福祉士協会 副会長

(公社)日本精神保健福祉士協会青森支部代議員 津川 貴史 (青森県立つくしが丘病院)

青森県精神保健福祉士協会の皆様、いかがお過ごしですか。私は毎日赤コーラを飲んで頑張っております。

さて、皆様は、“DPAT”をご存知ですか？“Disaster Psychiatric Assistance Team” (災害派遣精神医療チーム)の略で、東日本大震災等において課題となった災害時の精神医療に対応すべく全国で整備が進められています。青森県においても平成27年度に検討委員会が立ち上げられ、今年度中に体制整備を行う予定でした。

そんな中で今年4月14日に熊本地方で大地震が発生しました。急遽青森県としても、体制整備が不十分なままではありましたが青森DPATを派遣することになりました。青森県からは私が所属しております青森県立つくしが丘病院チームを1次隊、弘前愛成会病院と弘前大学医学部付属病院混成チームを2次隊として2チームの派遣となりました。

1次隊は5月16日～20日の5日間被災地入りし、DPAT調整本部・拠点本部での支援にあたりました。熊本地震においても被災し機能不全に陥った病院の多くが精神科病院ということもあり、DMATや自衛隊と協力して患者搬送などに貢献したそうです。

しかしながら、まだDPATのない都道府県も多く、今回参加



【青森県立つくしが丘病院DPAT】

右端が津川さん。青森県初のDPAT派遣という貴重な経験をお伝えくださり、本当にありがとうございました。

したチームの多くも研修未受講であったそうで課題も山積んでいます。青森県も正規の登録チームが3チームしかなく、自県が被災した場合に中長期的に対応できる状況ではありません。精神科病院に勤務している会員の皆様には、ぜひ勤務先のチーム登録をご検討下さいますようお願い申し上げます。

<PSWリレー>



今回は芙蓉会病院の斎藤徳子さんよりアルコール依存症のケースとのかかわりを中心に、PSWとして思うところをお寄せいただきました。

はじめまして。青森市の芙蓉会病院に勤務しています斎藤徳子と申します。入社して8年がたち、たくさんの出会いと別れがありました。

今回は、私が担当していたアルコール依存症のケースを通し、PSWとしての葛藤、やりがいなどについてお伝えしたいと思います。

5年前の事です。お酒の事が原因で離婚し兄弟からは「もう一緒に暮らせない」と言われ、自身の力では立てず、車椅子姿で泣いている患者さんと出会いました。アルコール依存症でした。入院となったものの、患者さんも兄弟も心はボロボロで疲れ果てていました。今後の生活をどうしていこうか…本人はお酒を飲む事をやめたいと涙する一方で何度も葛藤に苦しみ、時に私を怒鳴り続けました。退院後、兄弟とは別々に暮らす事になりましたが、本人は1滴も飲みませんでした。家族は家族教室に通い始め、本人も必ず定期的に受診していました。次第に2人の距離は少しずつ近づき始め、笑顔が戻っていきました。私は本人が受診の度にたわいもない話を2人ですることが楽しみでした。

しかし突然その患者さんはガンを告知されました。一緒に外来ホールで泣きました。なぜ、断酒を頑張っていて、これからとい

う時に…「どうせなら、飲んでしまおうと思った。でも飲まない。もう皆を裏切りたくない。」と患者さんは言い、積極的な治療はしないと決め、痛みを耐えながら通院を続けました。でもだんだんと弱っていく姿を見るのは正直辛く怖かったです。何も出来ない自分が無力でした。

そして今年、永遠の別れとなりました。しばらくして家族が病院に来てくれました。「何も出来なくてごめんなさい。」と私が話し始めると、家族の方は言いました。「芙蓉会に来てよかった。あの時はこんな結末は考えられなかった。本人が頑張っている姿にどれだけ励まされたことか…。離婚しずっと会えなかった子供達も来てくれて、皆に見守られながら、最期を迎える事が出来た。幸せだったと思う。1人ではお酒はやめる事は出来なかった。この病気に立ち向かえなかった。ありがとう。」

患者さんのアルコールからの回復の力は本当にすごいものでした。

回復とは色んな形があり、色んな回復の道があるのです。

だから、今日もまた私は伝えていきます。アルコール依存症は回復出来る病気であり、回復は誰にでも出来るのです。諦めないでほしい…1人でも多くの方に伝えていきたいです。

あおいもりPSW通信 2017.1.8/No.23

発行元:青森県精神保健福祉士協会

発行責任者:会長 山田 伸

事務局:一般社団法人 青森精神医学研究所 附属 浅虫温泉病院

〒039-3501

青森県青森市大字浅虫字内野27-2

TEL 017-752-3004 FAX 017-052-3194

URL <http://aomori-psw.com>

広報委員会

近藤 龍太郎 福井 康乃 下田中 隆哉

鹿俣 亘 渋谷 雅仁 清水 恵美

成田 章子